

村 長	副村長	課 長	係 長	課 員	担 当

報 告 書

項 目 大久保地区「みらいトーク！」実施報告書

日 時 令和8年7月17日（金）18時30分～20時00分

場 所 大久保集会所

事 務 局 総務企画課長、企画係長、穴戸、大内、佐藤（路）

出 席 者 6名

1 目的

令和9年度から始まる第6次総合振興計画の策定に向け、大久保地区の現状や将来への不安、残したいもの、10年後に向けて必要な取組等について意見を聴取するため、大久保地区「みらいトーク！」を実施した。

2 実施概要

はじめに、村から第6次総合振興計画の策定趣旨や計画骨子の考え方について説明した。その後、参加者及び村職員が自己紹介を行い、地区との関わりや日頃感じていることを共有した。

意見交換では、大久保地区のビジョンマップを活用しながら、残したいもの、大切にしたいもの、心配なこと、今後あったらよいものなどについて話し合った。また、付箋を用いて意見を出し合い、地図上の場所や地区全体の課題・希望と結び付けながら整理した。

3 主な意見

（１）人口減少と役員負担の集中

人口減少により、消防団、実行組合、テレビ共同受信組合、隣組、交通安全関係など、複数の役職を同じ住民が兼ねる状況が生じているとの意見が出された。役職を終えても別の役が回ってくるなど、限られた人数に地域運営の負担が集中している。

今後さらに担い手が減少した場合、現在の団体や役職をそのまま維持することは難しい。団体や地区の枠を越えた連携、組織の統合、役職や作業の削減など、人口規模に合った運営方法を検討する必要がある。

（２）除雪・移動・買い物への将来的な不安

地区内には坂道が多く、冬季は除雪後の路面が滑りやすくなるなど、歩行や移動に危険を感じる場所があるとの意見があった。

現在は住民が除雪機を使い、自宅だけでなく近隣世帯の除雪も行っているが、機械を扱える人が高齢になれば、家の前を除雪できず、外出できなくなるとの強い不安が共有された。補助金だけではなく、実際に作業を担う人を確保する仕組みが必要である。

また、商店がなくなり、現在は移動販売や宅配等が利用されている。高齢になっても買い物や通院ができるよう、既存のコミュニティバスの利便性向上に加え、デマンド型交通やライドシェア等の方法も含め、移動手段を検討する必要がある。

（３）獣害の深刻化と森林管理

以前はあまり見られなかった熊、鹿、猿、カモシカなどが、集落や道路の近くまで出没するようになったとの意見が出された。特に鹿の増加については、農作物への被害だけでなく、森林の植物が食べられることで、将来的に山の保水力や斜面の安全性に影響するのではないかと懸念も示された。

鹿などをジビエやペットフードに活用できないかという案も出された。一方で、わなの免許を持つ人がいても、捕獲後の処理や加工を担える人がいないことが課題として挙げられた。

獣害対策を事業につなげる場合には、捕獲、処理、加工、販売までを担う人材や施設、衛生管理等を含めた仕組みが必要である。

（４）過去の水害と防災

大久保地区では、平成 7 年 8 月の大雨により、土砂崩れや道路の通行止め、住宅への浸水等が発生したことが共有された。玄関付近まで水が押し寄せた家や、隣接する池や水路と住宅周辺が一体となるほど浸水した場所もあったとの話があった。

発生から長い年月が経過しているが、住民にとっては現在も強く記憶に残る災害となっている。

今後も集中豪雨等に備え、過去の被害箇所や地域の経験を記録し、避難経路、道路、斜面、水路等の点検や防災情報の共有に生かす必要がある。

（５）水・農産物・住民活動などの地域資源

大久保地区には、清水が湧く場所や水路、ため池があり、クレソンが自生するほど水がきれいな場所があるとの話があった。また、ホタルが見られる場所や、釣りを楽しめるため池なども地域の身近な魅力として挙げられた。

大久保で作られる米についても、色が白く、おいしいとの意見があり、日当たりや土壌などの地域特性を生かした農産物として評価された。

また、住民が自主的に沿道へアジサイを植え、景観を整えている取組も紹介された。「何もしなければ地域は悪くなるため、自分のできる範囲で取り組む」という姿勢があり、地域を自ら守ろうとする住民の強い当事者意識が確認された。

（６）柏木城跡の保存と活用

柏木城跡は、大久保地区を代表する歴史的資源として挙げられた。一方で、発掘した遺構は保全のために埋め戻されており、案内や説明がなければ、訪れた人や子どもには城跡の姿や価値が分かりにくいとの意見があった。

城の構造や歴史的背景を分かりやすく伝えるため、案内表示、動画、絵本、VR 等を活用し、当時の姿を可視化する案が出された。

また、来訪者を受け入れる環境として、活性化センター前の駐車スペースを活用するとともに、年間を通して

利用できる公衆トイレを整備してほしいとの具体的な意見があった。

(7) 廃屋への対応と地域の立ち寄り拠点

地区周辺には、老朽化が進んだ旧店舗や旧施設があり、建物の安全性や景観、防犯面を心配する声が出された。歴史資源を訪れる人や道路を通行する人の目にも触れるため、所有者や関係者と調整しながら、早期に対応する必要がある。

また、大久保地区周辺は通過する車が多い一方で、立ち寄る場所が少ないとの意見があった。

山塩を使った料理や地元野菜、米などを扱う、小規模な直売所や「小さな道の駅」のような場所があれば、通過する人を呼び込み、地域の食や産業を知ってもらう機会になるのではないかという提案が出された。

(8) 対話の結果の見える化と行政への期待

参加者からは、過去にも地域について同様の話し合いが行われたものの、制度上の制約などにより実現に至らず、毎回同じような意見を繰り返しているとの厳しい指摘があった。

話を聞くだけで終わるのではなく、出された意見のうち、何を検討し、何が実施できるのか、実施できない場合はなぜできないのかを住民へ説明する必要がある。

公衆トイレや廃屋対策など、目に見える改善が一つでも実現すれば、住民の理解や地域活動への意欲にもつながるとの意見があった。行政には、地域だけでは解決できない構造的な課題を整理し、住民とともに具体的な取組へつなげることが求められている。

4 総合振興計画への反映に向けた視点

- ・地域人口に合わせた役職、組織、地域活動の見直し
- ・地区や団体の枠を越えた組織の連携・統合の検討
- ・除雪作業を担う人材の確保と、高齢世帯の孤立を防ぐ仕組みづくり
- ・移動販売、宅配、コミュニティバス等を組み合わせた生活支援
- ・デマンド型交通等を含めた、高齢者の買い物・通院手段の検討

- ・熊、鹿、猿等の獣害対策と、捕獲後の処理まで含めた体制整備
- ・森林や斜面、水路等の管理と、過去の災害経験を生かした防災対策
- ・清水、クレソン、ホタル、米など、地域資源の保全と情報発信
- ・住民による自主的な景観・環境整備活動への支援
- ・柏木城跡の歴史を分かりやすく伝える案内・情報発信
- ・活性化センター周辺の駐車場、公衆トイレ等の受入環境の検討
- ・危険な廃屋・旧施設の所有者把握と、早期対応に向けた仕組みづくり
- ・住民意見の検討状況と実施結果を継続的に伝える仕組みづくり

5 まとめ

今回の対話では、人口減少により複数の役職が少人数に集中していること、将来の除雪や移動、獣害、廃屋、災害への不安など、大久保地区で暮らし続けるうえでの厳しい課題が共有された。

一方で、清水やクレソン、ホタル、おいしい米、柏木城跡などの地域資源や、アジサイロードの整備をはじめ、住民が自ら地域を守ってきた自治意識も確認された。限られた人数で多くの役割を担いながらも、「自分たちができることは行う」という住民の姿勢は、大久保地区の大きな力である。

今後は、住民の努力だけに地域維持を委ねるのではなく、役職や組織の見直し、除雪・移動支援、獣害対策、廃屋への対応など、地域だけでは解決できない課題を行政とともに整理する必要がある。

また、柏木城跡の案内や公衆トイレ、山塩や農産物を生かした立ち寄り拠点など、地域資源を生かした具体的な取組を小さくても実現し、その経過と結果を住民へ示すことが、地域と行政の信頼関係を築き、持続可能な集落づくりにつなげるうえで重要である。

以上